

**国際学生フォーラムに
参加して
(参加学生所感)**

被害を受けた人と結ぶ

カレル大学・哲学部・メトリチコヴァー・クリスティーナ



多くの人々がなくなる天然災害が少ないチェコのような国から来た私にとって、このプログラムはものすごく印象的なものでした。世界中の学生と交流しながら、自分の世界観がまた広がりました。たとえ同じことですけれど、世界中の国ではどういうふうになされているかとか、いろいろな考えやアイデアに溢れたプログラムでした。

最初は科学美術館、防災館の見学を行って、原子力に関わった見学を行いました。実際の講演会が始まる前に、お互いのことを知り合って、いろいろな考えが生まれ出されるいい環境で活躍しました。

東日本大地震からすでに五年が経ちました。それでも、その被害はまだ完全に復興されていません。皆の被害者が仮設住宅からまだ戻っていませんし、産業や漁業などもまだ復興していないという状態になっています。復興すること、被害を受けた地域で新たなコミュニティを立ち上げることに多種多様な問題が起きています。例えば自然災害の後、ボランティアの方がもちろん必要ですけれども、無理に人の命に入ったり、行動したりすることは被害者を助けるというよりも、その人をさらに傷つけるかもしれないです。

または、政府は被害者のニーズに答えていなかったり、住民を考えずに復興の計画をたてたりするという事実もあるらしいです。例えば陸前高田の人は国からの理解を得ることができなかったということを伺って、とても残念に思います。特に復興の際に地域の人にとって、国からの理解を得ることは、大事なことのひとつだと感じました。

長洞元気村の場合、災害から活発に復興しているコミュニティーについての話と、東京からのボランティアが陸前の人たちのために、新しい図書館の創立を支援したという話もとても感動しました。新しくコミュニティーを作るために、人が集まり、子供が遊びながら、大人がリラックスできる場所が必要となります。そして元気なコミュニティーこそ復興のチャンスが高くなるのではないのでしょうか。



結局、お茶の水女子大学の学生のプレゼンテーションであったり、私たち留学生のプレゼンテーションであったり、コミュニティーと人の結び付きという考えがいろいろな形で何回も述べられました。災害からの復興はものすごく難しい問題だと言えますけれども、人はこの世界で一人で住んでいるわけではないです。災害が起きた際にも一緒にその問題を直面すべきであると私 생각합니다。

弁護士でもないし、有名人でもない一般の大学生である私たちが何ができるだろうかと今回は考えてみました。そして被害を受けた地域やその場に住んでいる方々に、どうやって支援すればいいかと多様な提案が発表されました。個人として少ししかできないのかもしれませんが、ボランティアの活動に参加すること、フェスティバルを行うこと、情報を普及すること、こうした小さな一歩で、復興を助けることができると信じています。

第5回国際学生フォーラムに参加することができて、講演会、沢山のコメントなどを聞くことができて、とても感謝しております。世界中の国から来た学生のご意見や個人的な経験を伺って、自分の今までの考え方を深く反省したいと思います。フォーラムのおかげで自分の世界は一段と豊かになったように感じています。

国際被害フォーラムの感想

チェンマイ大学・人文学部・日本研究センター・ナッタゴン カンプアン



今回は日本に訪問した3回目の経験です。タイ人の一人としてフォーラムに参加しました。日本人の友達以外、様々な国の友達と考えや経験を話し合う機会もありました。災害は自分の国の問題だけではないと認識しました。世界の人々の協力によってこの問題を乗り越えるために情報の交流ネットワーク構想を立てることは必要だと思えます。

災害は世界中のどこでも、いつでも、起こる可能性があると言われていています。特に大災害はその地域に激しい影響を与えます。災害についての考えや経験を話し合うのは自分の国でその経験などを学んで採用できると思えます。しかも、災害に関する見学・活動は自分の国にその経験を役立てて使うヒントになりました。

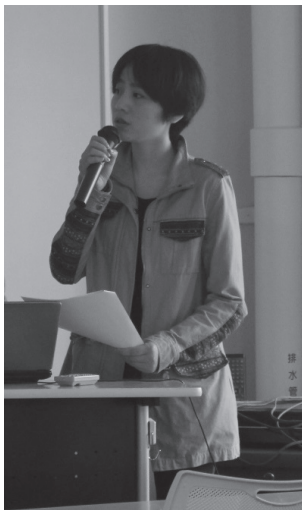
災害の防災や対応のためには科学技術の開発・応用は大切です。東京の科学技術館は科学技術について基本的な知識を表示され、わかりやすい遊び具もたくさんあります。それに、指導官は複雑なことを、子供たちなどがわかりやすくして学ばせます。これは科学技術の知識で未来・現在の被害防災のためにとっても役に立つと思えます。

東海テラパークは電気を効率的に作るのは原子力工学の知識が必要なことを認識させました。原子を聞くと恐れる人もいるそうですが、ちゃんと学べたら、人間にたいへん役に立つと思えます。さらに原子発電所の災害防災対策を計画することもとても必要です。私の国は、いま、そのことを論議しています。毎日、毎日、国の経済は大きくなりますから、まもなく無くなる石炭という電気原料を見直さなければなりません。

このフォーラムに参加する前にちょっと心配することがありましたが、とてもいい機会だと思い、参加することに決めました。日本に来た経験は2回ですが、前はタイ人のグループで来日しました。でも、このフォーラムは一人のタイ人として参加して、異文化や自分のべらべらできない日本語などで



心配していました。いま、こんな心配ことがなくなりました。なぜなら、他の留学生、お茶の水の学生は優しくて、あたたかい気持ちを感じているからです。また、ほそや先生にはいろいろお世話になって感動しました。こころよりありがとうございます。国際災害フォーラムはみんなの災害に対して気持ちや観点を理解して、そのことを、できるだけタイで役立てていきたいと思います。



この度、国際フォーラムに参加できて本当に勉強になって、いい思い出を作った。様々の国からきた大学生の皆さんと一緒に見学したり、シンポジウムに参加して討論したりして、充実した日々を過ごした。

これまで、ニュースや新聞などでしか情報を得られない原子力発電所を見学するチャンスはすごく大切だ。原子力発電の仕組みや事故の防止策などについても丁寧に紹介してくれたので、本当に勉強になった。世界の自然資源はあくまで有限なもので、新しい資源が発見されるまで、原子力発電が一番効率的で環境に優しいと思う。しかし、福島原発事故が二度と発生しないように、原子力発電に伴う危険性をどのように抑えるかが最も重要な課題といえる。中国もこれから多くの原子力発電所を立てると思うので、防止策において日本と更に交流を深めることができればと思う。

また、東日本大震災の復興についても、ニュースと新聞では手に入らない生の声を聞くことができた。津波の発生当時のこともシンポジウムでいろいろ教わったので、津波は本当に恐ろしいものだと感じた。災害を乗り越えて、前向きな姿で生活を立て直そうとしている粘り強さに感動した。そして、ボランティアとして被災地の助けになる気持ちは皆がもっているが、被災した方々のニーズを弁えてから、責任感をもって行動をとることがもっと効率的ではないかと思うようになった。

日本にくるのは初めてなので、最初はいろいろ不安だったが、十日間過ごしてから、日本は本当に住みやすい国だと実感した。電車の乗り換え方が分かりやすく、迷子になったら周りの人に聞けば親切に教えてくれた。慣れていないところといえば、お弁当もお水も冷たいものが多いところだと思う。

このフォーラムの日程は終わったが、皆さんとの繋がりは始まったばかりだ。これからも、皆さんとどんどん交流したいと思う。





日本語学部の学生として、ずっと実際の日本を見たかったです。日本語を勉強してからもう5年経ちましたが、日本へ行きたい夢は諦めていませんでした。今回のフォーラムのおかげで、初めて日本にきました。世界六カ国の大学の学生が集まり、「地球環境と災害へのグローバルな挑戦」というテーマについて、自分の意見などを交流することは非常に有意義だと思います。このフォーラムを支えてくださったお茶の水女子大学の教授や学生さん達には心から本当に感謝したいです。

初めての海外旅行ですから、どこに行っても、ちょっと迷っていた瞬間がありましたが、お茶の水女子大学の学生達はいつても、親切に行きたいところに案内してくれました。小さなことですが、私にとって、ずいぶん助かりました。その他、日本人の親切さ、ゴミの捨て方、食べ物のおいしさなどたくさんのもも印象深いです。

一週間は短い期間であったが、日本語を学習している私にとって、実際に日本を体験する機会を得られて、いろいろなところを見学できて、本当に多くのことを学ぶことができました。それに、お茶の水女子大学の見学、学生達との交流で大変有意義で楽しかった毎日でした。今回のプログラムを通して、実際の日本を肌で感じて、日本人と交流できて、自分の視野を広め、異文化を体験しました。とても素晴らしい経験だったと思います。この一週間の経験から少しでも多くのことを今後の人生に生かしていきたいです。日本と中国は一衣帯水ですが、自分なりの特色を持っています。日本へ行かなければ本当の日本の姿を感じることができませんでした。今回、私は本当に充実した一週間を過ごすことができました。機会があれば、日本にもう一度行きたいです。



最後に、このような機会を設けていただいて本当に感謝するとともに、参加してよかったと心から感じています。また、もし再び機会があったら、もう一回このようなプログラムに参加したいです。

フォーラムからの響き。

釜山外国語大学・コミュニケーション日本語学部・金和珍(キム・ファジン)

第5回国際学生フォーラムに参加させていただき大変ありがたく思っております。



日本に来る前、フォーラムの話を先生から聞いて、日本の学生だけではなく、なかなか会える機会のない8カ国の大学生と交流できる機会だと思い参加することになりました。ただ、話し合うだけではなく、このフォーラムの内容と通じる様々なイベントをご用意させていただいて本当に嬉しかったです。特に、12日に訪問した「防災館」はとても印象的でした。韓国もセウォルホの事故以降、災難に注目して災難安全教育を行ったり、災害に対応できるよう様々な形でイベントを開いたりするなど、やっとな積極的に向き合っています。ところが、私自身は教育を受けたこともないし、対応方法に

ついて教科書で学んだわけで、今回の防災館での体験は非常にショックでしたし、貴重な経験になりました。そして、2日目の茨城県は微妙でした。茨城に行くと聞いた時、茨城ではないとできない何かがあるのだろうと思いましたが、東海テラパークや原子力科学館での内容はわざと茨城まで行かなくてもとれる内容だったので、他の活動の方がよかったんじゃないかなーと若干思います。そして、陸前高田市の話を経験した人の口から伺って記事や動画でみるより、さらに伝えてきました。日本という国が持っているコミュニティーがうらやましいと思いましたが、実際韓国でそういう災害が起こったとしたら、コミュニティーが崩れずちゃんと動けるのかなーと、韓国は日本のようにはできないのではないかなーと思いつつ、韓国はまだまだ行く先が遠いだと感じました。日本のコミュニティーの役割をみてもすごく勉強になりました。

フォーラムについてですが、テーマが「災害」となっており、大学生として何ができるかという内容だったけれども、実際発表の内容を聞いてみたところ、2011年3月11日の

東日本大震災にフォーカスがなっていて驚きました。災害というのは天災も人災も含めた概念なのに、天災ばかりで11年のあの時を前提していて今回からはテーマの範囲を縮める必要があると思います。それ以外に、それぞれの発表の内容を聞きながら、大学生でもできることはいくらかもあると確信しましたし、このフォーラムの発表の準備する時、「大学生が何の力があって何ができるの。」と思った自分が恥ずかしかったです。今すぐ、行動に移されることは少ないかもしれませんが、一人一人が考えてみるのが大事だし、小さいことであってもやってみるのが重要だと感じられた良い機会でした。



韓国は3月から新学期ですが、3月という始まりの時点に日本で国籍も考え方も違う人たちと交流しながら、10日間過ごせられて本当にいい思い出になりました。日本語の専攻でもないのにスムーズに日本語で話せられたり、英語で発表できたり、英語で普通に会話ができる姿をみて帰国してさらに言語に力を入れようと思います。



このフォーラムで色々なことを学んだり、他の国の学生達と交流したり、とてもいい機会だったと思います。このフォーラムに参加させていただいて光栄です。実は来日前にすごく緊張しました。学生として一回日本に行きましたが、学生フォーラムに参加するのは英語でもありませんでした。自分の日本語能力も心配しました。しかし、JFKというアメリカの昔の大統領がかつて言った、「我々は月へ行くことを選びます……我々がそれを選ぶのはたやすいからではなく、困難だからです」。もちろん、月に行くことと比べたら心配することではないですが、その言葉を思い出してチャレンジ

しようと思いました。

最初は池袋防災館に行って火災のシミュレーションを体験しました。前に、なんども火災が起こる時にすべきことを学校で学びましたが、実際に体験できたのは今回が初めてでした。そして、マグニチュード7の震災のシミュレーションも体験しました。私の出身地のアメリカのカリフォルニア州はよく地震が起こるのですが、大きい地震は珍しくてほとんどないです。なので、45秒間にこんなに大きな地震の激しさと怖さがあるのかと驚きました。また、次の日に原子力について講義を聞きました。そして、日本のエネルギーの問題について初めて知りました。代替エネルギーはやはり大切なことだと改めて感じました。火曜日には、ゲストの講演を聞いて本当に感動しました。分からない部分もありましたが、ゲストの粘り強さと強い感情に感動しました。復興の難しさと複雑な問題について知り、災害の余波は簡単に解決できることではないと感じました。最後に、シンポジウムで学生達の様々な国のアイデアや行動を聞いて、一緒に意見を交換しあえてよかったです。参加してくださった先生方の貴重なご意見により、視野を広げて考えることができました。



このフォーラムで重要な問題を考えたり、いろいろな国の学生たちと仲良くしたり、本当に充実していました。グローバル社会に属する一人としてこのフォーラムに参加できたことは非常に意味があったことだと思います。

勉強になったフォーラム

お茶の水女子大学 交換留学生 アメル・ナルン



菅生先生のおかげで、国際学生フォーラムに参加した。有難いです。この経験を忘れずに、生活を続けたいと思う。とても嬉しいです。たくさん習った。面白い人に会った。寮の生活を手伝ってあげた。ちょっとでも責任感を持てるようになった。

最初に、スタディーツアーから始めたことはいいアイデアだと思う。そうしたから、参加者の皆さんと仲良くなって、勉強できた。池袋防災館で有用なもの習った。フランスから来た留学生として、もっと早めに習えればよかったと思う。

グローバル文化学環企画について、いい発表を聞いた。面白かった。特に、最後の発表は興味深い。小さいことでも、できることをしたら、そうすれば将来はもっと明るくなるということを学んだ。一緒に、一歩ずつ、将来を作りましょう。

最後に、食事について、ベジタリアンなので、迷惑をかけてごめんなさい。弁当とかレストランとか、皆さんは私のことを考えてくれた、感動した。ありがとうございました。食べ物は美味しかった。和食を食べた。日本のお菓子も食べた。たくさんの新しいものを食べた、嬉しいです。

先生たちは優しい。全部を準備した、大変だった。お疲れ様です。





今回、国際学生フォーラム参加し、さまざまな国の参加者と関わり、意見を出し合い議論をしたことで、新しい気づきがたくさんあった。普段私の意識していなかった視点を持った参加者との会話や、災害と復興支援についての議論をとおして改めて考えたことを振り返って行きたい。

まず、印象に残っているのは、二日間のスタディツアーだ。スタディツアーでは、原子力発電への自分の認識を改めて思い返すことができたと思う。私は、もともと、福島第一原子力発電所の事故があったこともあり、原子力発電所は大きなリスクを伴うものなのであるべきではないと漠然と感じていた。しかし、科学技術館や東海テラパークでお話をきき、原発の供給電力の安定性や経済的な部分を知り、私たちは原発によって恩恵を受けていることも否めないと強く感じた。また、東海発電所の方のお話で、「原発は、100パーセント安全ではない。そして、それは原発だけでなく、私たちの日常におけるさまざまなものにリスク(飛行機や自動車)はあり、社会はリスクと隣り合わせで発展してきた。私たちは、そのなかで原発のリスクを限りなくゼロに近づけられるよう努める。」といった内容は特に印象に残っている。このお話をきき、原発の事故が起きたことで、原発は危険だから失くせ、とすぐにいうことは早計であり、どうして事故を防げなかったのか、リスク管理とは何なのかということにもう少し目を向けるべきなのではないかと感じた。

次に印象に残っているのは、シンポジウムにおける学生の発表だ。色々なユニークな復興支援のアイデアをきき、私たちが国際的にできる復興支援は何かということ視野を広げて考えることができた。また、復興支援は単なる自分の自己満足として行うべきではなく、今被災地に何が必要なのかを適切に判断して支援のかたちを考えなければならないと感じた。そのためには、被災の現状に関する情報を自ら知ろうとする姿勢が大切だと強く思った。

最後に、参加者との交流が、とても心に残っている。8日間一緒に過ごす中で、私たちが普段目に止めないポスターについて驚く姿をみて、改めて私自身も考えさせられたりと、新しい視点をもった参加者と関わることは非常に刺激的だった。この出会いを大切にして、今後も交流を続けていきたいと思っている。



このフォーラムに参加したことで、普段では絶対に味わえない貴重な経験と素敵な人とのつながりができたと思う。この機会を与えてくださった、全ての方々に心から感謝している。



私はツアーの中で様々な立場の人の話を聴き、主に二つのことを感じました。

一つは、池袋の防災館や茨城の原子力施設で説明から感じたことです。話してくださった相手は、モノを提供する公の立場でした。震災以降、政府側の行動に対して議論が続いています。そのため、直に公の仕事をしている人の話には大変興味がありました。ですが彼らはリスクとメリットの情報を私達にバランスよく伝えていないと感じました。特に、原子力施設では主に原子力発電の有用性ばかりが主張され、デメリットは曖昧なまま誰かがリスクを追わなくてはならないと言っている印象を受けました。私達が知っている災害のリスクや被害はほんの一部です。もちろん、私達自身で知りに行く必要はあります。ですが私達が近づける情報源はとても限られています。現場で意思決定の中心を担う人々がどのような倫理観を持って私達に情報を提供していくかが重要だと思いました。互いに理解し、妥協していくには、物事の両側面と、なぜするのかという明確な理由を共有していく必要があると感じています。

二つ目は、被災地で復興に励んでいる方々のお話から感じたことです。彼らは、被災した当事者として、規律にばかりとらわれている役所の方や、一方的なボランティアのあり方を述べていました。また、生きようとする意思の強さもとても感じました。途上国に行くと、お金や建物など何も無くても人々の生命力が満ちていて圧倒されると聞いたことがあります。被災地も同じだと感じました。だからこそ、私達は、彼らの活力を途絶えさせない支援をしていくべきだと思います。しかし、ボランティアへの対応の仕方や、学者を追い返した等のお話を聞き、ボランティアされる側の態度も見直されるべきだと感じます。助ける側の人、助けたいという気持ちだけで動いていることが多々あります。だからこそ、自分たち

が本当に欲しい支援を正直に伝えていく必要があると感じました。被災地ですることがなくても、実際に行った人ならではの情報発信やツテを利用した援助が出来ると思います。それらを頼むことも重要なはずです。私達は、する側・される側の意思疎通を意欲的にしていかなければならないと思いました。学生のプレゼンテーシ



ョンを聞いて、更に強く感じました。文化や法律、社会が違う海外の学生と自分の考えを伝え、意見交換できたことで問題について整理し、熟慮することが出来ました。また、海外の学生のアイデアはとても詳しく落とし込まれていて、新たな発想を知ることができ、ただ学ぶのではなく行動に移すために必要なことがある気づくことも出来ました。自分の持っている能力と状況で、何が出来るのか、このフォーラムをきっかけにもっと現実的で具体的なことを考えていきたいと思っています。



このフォーラムの中で、私は「生の声を聞く」という貴重な体験をしました。普段の生活の中では、自分の身の回りの地域や地元のこと、大学のなかの事しか耳に入ってきません。しかし今回は東北に住む人々の思いや、実際に東北へ行った人々の話、外国の状況や留学生からの視点など、それぞれの視点から直接話を聞くことができました。それはテレビや人の噂から聞くものとは異なる部分が多く、とても新鮮でした。同時に、私たちが普段持っているイメージや知識がいかに小さく、偏ったものであるかを思い知らされました。

生の声は、私にさまざまな視点から災害をみることの大切さを教えてくれました。例えば、ボランティアと聞くととても良いもののように思えますが、被災地にとっては迷惑となるボランティア活動があり、実際にそれが行われてしまったこと。東日本大震災のあと避難してきた人々を受け入れたが、それによって壊された町があること。被災地の人々はもう被害者として見られたくないという思いを抱えていること。このように今まで思ってきたこととは異なる部分がありました。また同じ視点に立ってもそれぞれの人によっても意見は異なります。私たちは一方的な善意の押し売りをしてはいけなし、何が本当に必要なのか、何が情報として正しいのかということを見極めなければなりません。それは日本の中だけの話ではありませんでした。海外の学生も事実と報道や世論が異なっているという体験を何度もしています。私たちは一個人としても情報を集め、勝手なイメージではなく、正しく「知る」ということの必要性を認識しました。

災害があったとき、そのあと私たちに何ができるのか。シンポジウムではこれに対するための大学生連合をつくる、インターネット上で世界をつなぐコミュニティをつくる、被災地のことを活気づけまた忘れないためにイベントを催す、防災と娯楽を融合させたイベントをつくる、など今までの私にはなかった発想ができました。最も印象的だったのは、今タイで人気のあるサイクリングの活動と、



防災のための訓練や事前調査を融合させた防災サイクリングをするというアイデアです。災害と聞いて楽しいイメージを持つ人はいないですし、辛い記憶や衝撃的な映像によって気持ちが暗くなったり、消極的になったりする人が多いと思います。そのために普段から防災を心掛けてはいても、実践に移している人は国内外で少ないようです。しかし自分が参加したいと思える楽しい活動の中に防災運動が組み込まれていたら、より積極的に参加できるはずです。サイクリングではなくても、このような娯楽と防災を兼ねる活動案は日本でも応用できるのではないのでしょうか。防災に関して消極的な人々に防災知識を持ってもらうことは、次に起こりうる災害に対する予防策としてとても有益だと思います。

このフォーラムを通して海外の学生との関わり、大学生としての考え、東日本大震災についての理解など、多くのものを得ることができました。ただ大学の授業に出ているだけでは絶対に得られません。今回知ったことの中には、衝撃的なことも面白いこともありました。話によって感銘を受けたこともあります。この経験をこれから生かしていきたいと思いません。



私にとって今回が初めてとなる国際フォーラムへの参加でしたが、予想以上に充実した日々を送ることができました。中国、韓国、アメリカ、タイ、チェコと5つの国からいらっしゃった8名の留学生と1週間を共に過ごして、数え切れないほど多くのことを学ぶことができました。留学生との真剣な議論、他愛もない会話、すべてが新鮮で刺激的で、春休みの1週間でこれほどに貴重な体験をするための時間に使うことができ、このフォーラムに参加して良かったといま心から思っています。初日と二日目の都内・茨城県での課外活動では生憎の天気にもかかわらず、留学生・お茶大生の双方の積極的な交流でたちまちに打ち解けることができたのも、歓迎会のかかるた大会で盛り上がったことも、シンポジウムで熱い議論を展開したことも、全てとても印象に残っています。個人的に、二日目の夜に留学生を連れてお好み焼きもんじゃ焼き食べ放題に行ったことが一番の思い出です。鉄板に苦戦しながらお好み焼きともんじゃ焼きを一生懸命作る留学生の姿は微笑ましくて、日本の文化を心から楽しんでくれたことはとても嬉しいことでした。おいしい食事を囲んでのやりとりは本当に楽しくて、数日後に控えていた当フォーラム目玉イベントであるシンポジウムが大いに楽しみになりました。シンポジウム当日は、留学生のみなさんの流暢な美しい日本語と、自分たち日本人だけでは考え付かないような新提案が発表されて非常に勉強になりましたし、これまで避けていた震災について真剣に考える良い機会となりました。留学生の自国の災害対策と合わせた提案はどれも大学生ならではのありつつも、具体的でかつ有効的な企画ばかりで、これはシンポジウム全体の課題ともなったのですが、今後いかに現実に形にして実行していくかを考えなければならぬと強く感じました。お茶大生は東日本大震災を取り上げて、それぞれが個人の体験や考えを踏まえて各々の思いを述べました。中には実際に被災した学生もいて、彼女たちが語った言葉は、震災の影響をほとんど受けなかった私にとっても非常に心痛む現実でした。同じ大学生という共通点を持ちながらも、これほど考えることが違うということに衝撃を受けましたし、マスメディアでは伝えきれない、あるいは表に出てくることがない被災者の苦しい正直な思いを初めて知ることができました。今まで漠然としか考えてこなかったマスメディアやボランティアをめぐ

る問題が自分の中で大きく膨らんでいき、さらに各国との学生との話し合いを通じて、正しい情報を伝えることの重要性和難しさに悩みました。このフォーラムで得た繋がりや発想を今後活かすことが、私たち全員に課せられた課題であると思います。これをスタート地点として、震災に限らずさまざまな問題について取り組む姿勢を持ち続けたいと思います。





この学生フォーラムに参加したきっかけは学内の掲示を見たことです。大学生になって2回目の長期休暇ということもあり、何か実のある活動をしてみたいという思いで参加しました。こんなにたくさんの国の方々と一緒に活動できるという機会が初めてだったので、とても楽しみであると同時にいたいどんな一週間になるのだろうかと不安でもありました。

今回この学生フォーラムでは震災や災害という大きなテーマのもと活動していきました。一日目には地震の揺れを防災施設で体験しました。私たちにとって地震はとても身近なものです。しかし地震そのものを経験したことが無い国の方々から地震の感想を聞くと今まで思いもしなかった感想が聞けて新鮮でした。

また、国際シンポジウムのプレゼン発表では様々な発表や意見があり興味を持って聞くことができました。学生団体を作る、各国で連携して情報共有をしていく。簡単には行きませんがここで提案されたことすべてが一つの大きな流れとなつてつながっていったらとてもいいのではないかと思います。陸前高田の方々のお話を伺って、ボランティアの問題点などマイナスの側面もみんなで一緒に学べたことも意味のある活動だと思っています。プレゼンの中には本当に具体的な提案もありここでの出会いをきっかけにますます防災、震災後を支える活動の国際的な連携や、枠組みが広がっていったらと思います。

世界の学生がこんなにもボランティア活動等、積極的に様々な活動をしていることを知り、自分も大学生の今だからできることを積極的にやっていきたいです。

国際シンポジウムでのディスカッションで自分の想いの丈を初めて人に話しました。今まで他人の目を気にして話してこなかったことだけに自分の発言に自分が一番驚いており

ます。人前でこうした今まで話せなかったことを堂々と話せるのも災害について真剣に向き合ったこのシンポジウムだからではないかと思います。

正規の活動以外にも休み時間や移動中など留学生の方たちとたくさん話げできたことも私にとっては大きな刺激となりました。日本語が上手な方たちが多く、「どうやって日本語を勉強したの？」と何人かの方に聞いてみました。やり方は皆さん様々でしたが、毎日熱心に勉強されたという点で共通していました。私は外国語として英語を学習しています。流ちょうに話せるようになりたいと思う反面改めてもっと努力しないといけないなと痛感しました。

様々な学習以外のアクティビティをしたり、放課後にはみんなでご飯を食べに行ったりして毎日楽しく参加させていただくことができ、たくさんの刺激をもらいました。



日本ではこれから新しい学年が始まりますが、ここで考えたことや刺激をもらったことを思い出しながら日々の学校生活を送っていきたくて考えております。また、いつか自分が今回仲良くなった留学生の方の国に会いに行きたいです。

最後となりますが、このプログラムを準備、企画して下さった国際学生フォーラム事務局様はじめたくさんの方々はこの場でお礼をお申し上げたいと思います。



約1週間のフォーラムの日程は、本当にあつという間だった。多くの人と関わり、たくさん話を聞いた。この1週間で私が学んだことは「多様性」と「多面性」の大切さであると思う。

私が最初にこの「多様性」と「多面性」を意識したのは、13日の東海村学外イベントだ。訪れた施設で、原子力発電の仕組みやリスクについて学んだ。私たちはあの事故以来、自分たちの生活の中に潜むリスクを思い知った。それまで「絶対安全」とうたっていた国家に対する信頼性が揺らぎ、目に見えない放射線の恐ろしさは国内だけでなく、国外の人々にも伝わっていった。5年経った今でも、様々な意見が飛び交っている。化石燃料の乏しい日本では原子力発電は必要不可欠だ、代替エネルギーの開発をもっと進めるべきだ、危険な原子力発電は今すぐにでもやめるべきだ……。私は、まだ自分の中で原子力発電の可否についてはっきりとした考えは出せておらず、どの意見も納得できるものだと思う。そのような今の状態であるからこそ、できるだけ偏見なく多くの立場の意見を聞くことが本当に大切であると実感した。今は「科学的であること」が重要視されがちな時代であるが、それだけにはこだわらず、「多様な」意見を吸収し、心をフラットにした状態で「多面的な」考察を行うことができるようになりたい、と強く感じた。

次に「多様性」と「多面性」の重要性を感じたのは15日のグローバル文化学環のイベントである。陸前高田実習を行った学生や、陸前高田の方々のお話をお聞きして、私が気づかされたのは、被災地や被災者の状況は本当に多様であり、決してひとくくりにはできないということだ。恥ずかしながら私は今まで被災の「多様性」について考えたことがなく、今回のお話の中で被災者の中には本当に多様な感情や状況があることがわかり、それを知らずに東日本大震災を捉えてしまうことは本当に不十分なことであったと感じた。いろいろな思いを、感情を込めて力強く語ってくださった陸前高田の方々からは強いエネル

ギーとインパクトが感じられ、大変有意義な時間だった。

そして最も私が「多様性」「多面性」を感じたのはこのフォーラムに参加した留学生やお茶大生との関わりの中である。特に、文化や歴史の異なるさまざまな国からやってきた留学生たちのお話を聞くことはとてもおもしろく、強い刺激を受けた。「地球環境と災害へのグローバルな挑戦」というテーマのもとにプレゼンを行い、意見を交換し合ったこと

で、それぞれの人が本当に多様な考えをもっていることが実感でき、そういった意見を聞いたことは私にとって大きな財産となった。ある問題について論じるときに、当たり前であるが個人によって意見は異なる。その異なる意見を素直に吸収し、さらに自分の中で広げていったり相手に意見をしたりすることで、お互いに高め合っていけるのだと



いうことが身を以て感じられた。普段の生活の中では、あるテーマにそって議論する、という機会が少ない。このような機会を与えてくれたこのフォーラムは貴重な経験であった。ひとりひとりがもつ「多様な」意見を大切に、それらについて「多面的に」考察を深め結論や解決策へと少しずつ近づこうとすることこそが、急速なグローバル化が叫ばれている今日の世界の中で、地球市民としてできることではないかと感じた。

このフォーラムで感じた「多様性」「多面性」の重要性を忘れず、これからの生活の中でそれらを活かしていきたい。そして、生活世界の様々な問題や課題について、積極的に取り組んでいきたい。